

抄 発遣招喚

先輩諸師のご指導・ご叱声をお待ちしております。

一．題意

「散善義」回向発願心釈の二河譬に説かれている釈迦の発遣と弥陀の招喚の関係について窺い、発遣の意は、要門を廃して弘願の法を勧めることであって、二尊一致して、弘願の法を勧められていることを明らかにする。

二．出拠 凡例：註 注釈版聖典、全 真宗聖教全書、新全 浄土真宗聖教全書(2011年3月25日初版)

『観経疏』「玄義分 序題門 要弘二門」の文(Ref 七祖註釈版 P300-1、全 P443)

たまたま韋提、請(しょう)を致して、「われいま安楽に往生せんと樂欲(ぎょうよく)す。ただ願はくは如来、われに思惟を教へたまへ、われに正受を教へたまへ」といふによりて、しかも(然るに)娑婆の化主(=釈尊)はその請によるがゆゑにすなはち広く浄土の要門を開き、安楽の能人(=阿弥陀仏)は別意の弘願を顕彰したまふ。 全書では、逆接で読んで居る。

その要門とはすなはちこの『観経』の定散二門これなり。「定」はすなはち慮りを息(や)めてもって心(しん)を凝らす。「散」はすなはち悪を廃してもって善を修す。この二行を回して往生を求願せよと也。弘願といふは『大経』の説の如し。「一切善悪の凡夫生を得るものは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁となさざるはなし」と(Ref七註 P300)。

『観経疏』「玄義分 釈名門」の文(Ref 七祖註釈版 P301、全 P443)

仰ぎておもんみれば、釈迦はこの方より発遣し、弥陀はすなはちかの国より来迎したまふ。かしこに喚ばひここに遣はす、あに去かざるべけんや。

『観経疏』「散善義」譬喩(上品上生釈 回向発願心釈)の文(Ref 註釈版 P223～225、七註 P466-8)、全 P539)

・今更に行者の為に一の譬喩を説きて、信心を守護して以て外邪異見の難を防がん。何者か是なるや。譬へば人有りて西に向ひて行かんと欲するに百千之里ならん。忽然として中路に見れば二河あり。一には是火の河南に在り、二には是水の河北に在り。二河各々闊さ百歩、各深くして底なし。正しく水火の中間に一の白道有り。闊さ四五寸なるべし。この道東の岸より西の岸に至るに亦長さ百歩。その水の波浪交り過ぎて道を湿すにその火焰亦来りて道を焼く。水火相交りて常に休息無けん(註釈版 P223、全 P539)・・・(中略)・・・

「すでにこの道あり、必ず可度すべし」と。この念をなすとき、東の岸にたちまちに人の勤むる声を聞く。「きみただ決定してこの道を尋ねて行け。必ず死の難なけん。もし住(とど)まらばすなはち死せん」と。また西の岸の上に、人ありて喚ばうていはく、「なんぢ一心に正念にしてただちに来れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。

この人、すでに此に遣はしかしこに喚ばふを聞いて、即ち自ら正しく身心に当たりて、決定して道を尋ねて直ちに進んで、疑怯退心(ぎこうたいしん)を生ぜずして、或いは行くこと一分二分するに、・・・須臾に即ち西の岸に到りて、永く諸の難を離る。(註釈版 P224、全 P540))

…これはこれ喩(喩の字、をしへなり)へなり(註釈版 P224、全 P540))。

『観経疏』「散善義 合喩(上品上生釈、回向発願心釈)の文 (Ref 註釈版 P225 ~ 227、七註 P468 ~ 470、全 P540))

- ・次に喩へを合せば、「東の岸」といふは、すなはちこの娑婆の火宅に喩ふ。
- ・「西の岸」といふは、すなはち極楽宝国に喩ふ。
- ・「無人空迴(くうきょう)の沢」といふは、即ち常に悪友に随ひて真の善知識に値はざるに喩ふ。
- ・「水火の二河」といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごとしと喩ふ。
- ・「中間の白道四五寸」といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。いまし貪瞋強(こわ)きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心、微(み)なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。
- ・「水波つねに道を湿(うるお)す」とは、すなはち愛心つねに起りてよく善心を染汚(ぜんわ)するに喩ふ。
- ・「火焰つねに道を焼く」とは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩ふ。
- ・「人、道の上を行いて、ただちに西に向かふ」といふは、すなはちもろもろの行業を回してただちに西方に向かふに喩ふ。
- ・「東の岸に人の声の勧め遣はずを聞いて、道を尋ねてただちに西に進む」といふは、すなはち釈迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて尋ねべきに喩ふ、すなはちこれを声のごとしと喩ふるなり。
- ・「あるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び回(かえ)す」といふは、すなはち別解・別行・悪見の人等、妄りに見解をもってたがひにあひ惑乱し、およびみづから罪を造りて退失すと説くに喩ふるなり。
- ・「西の岸の上に人ありて喚ばふ」といふは、すなはち弥陀の願意に喩ふ。
- ・「須臾に西の岸に到りて善友あひ見て喜ぶ」といふは、すなはち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒して自ら纏ひて、解脱するに由なし。仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまふによって、いま二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの国に生ずることを得て、仏とあひ見て慶喜すること、なんぞ極まらんと喩ふるなり(註釈版 P226-7、全 -P541)。

- 1)纏ひて 自らの業に縛り付けられて、
- 2)悲心招喚 大悲心をもって浄土へ来たれと招きよぶこと。

「致使凡夫念即生」(『法事讃・下』(Ref註釈版聖典P692)

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。…(中略)…諸仏出世の直説、如来成道の素懐は、凡夫は弥陀の本願を念ぜしめて即生するをむねとすべしとなり。」

『浄土文類聚鈔』の文 (Ref 註釈版 P493、全 P452)。

西の岸の上に人ありて喚ばひてのたまはく、<なんぢ、一心正念にしてただちに來たれ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ>と。また<中間の白道>といふは、すなはち、貪瞋煩惱のなかによく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。仰いで釈迦の発遣を蒙り、また弥陀の招喚したまふによりて、水火二河を顧みず、かの願力の道に乗ず」と

『高僧和讃』『善導讃』 (Ref 註釈版 P590、全 P509)

(69)善導大師証をこひ 定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき 弘願の信心守護せしむ

(70)経道滅尽ときいたり 如来出世の本意なる

弘願真宗にあひぬれば 凡夫念じてさとるなり

(71)仏法力の不思議には 諸邪業繫(しよじゃごうけ)さはらねば

弥陀の本弘誓願を 増上縁となづけたり

三．釈名しゃくみょう：「釈名」とは、名目(教義概念)を解釈する意、教義概念規定をいう。文言の定義である。

・「発遣」とは、釈尊が衆生に浄土に往生せよと勧めつかわされることをいう(Ref 註P226、七祖註P301,P469)。使者を遣はして勧告することをいう(Ref 真宗大辞典 P1801)

・「招喚」とは、阿弥陀仏が衆生に、浄土へ來たれと招きよぶことをいう(Ref 七祖註 P469)。

・「喩へ」とは、さとすなり、をしへなり(Ref 註釈版聖典 P223,225)。

四．義相ぎそう

(一)二尊の関係(発遣には、方便が含まれるか否か)

・ 『観経疏』『玄義分 序題門 要弘二門』の文 (Ref 七祖 P300-1、全 -P443 3)

ア)娑婆の化主は韋提希の請によるがゆゑにすなはち広く浄土の要門を開き、

イ)安樂の能人は別意の弘願を顕彰したまふ。

・ の2 『観経疏』『散善義 下輩総讃』の文 (Ref 七祖註釈版 P497、全 -P556)

前には十三観を明かして以て「定善」となす。すなはちこれ韋提の致請(ちしょう)にして、如来(釈尊)すでに答えたまふ。後には三福・九品を明かして、名づけて「散善」となす。これ仏(釈尊)の自説なり。「自説」 随自意。

・ 『観経疏』『耆闍会 付属釈』 (Ref 七註 P500、全 P558)

六に「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、遐代に流通せしめたまふことを明かす。上来定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意(こころ)、衆生をして一向にもっぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

【趣意】「憂悩なき処、極樂世界の阿弥陀仏の所(みもと)に生まれたい。ついては、我に思惟を教へたまへ我に正受を教へたまえ(Ref『観経』序文 發起序 欣浄縁、註 P90,91)」と韋提希

が請を致したが依るが故に、釈尊は、定散二門をお開き下さった。これは、定散二門に耐えな
いわが身を思い知らしめ、弘願の救いの対象としてお育てになる方便がその目的である。

- ・ 『観経疏』「玄義分 釈名門」の文 (Ref 七祖註釈版 P301、全 P443 8))

ア) 仰ぎておもんみれば、釈迦はこの方より発遣し、弥陀はすなはちかの国より来迎した
まふ。かしこに喚ばひここに遣はす、あに去かざるべけんや。

【論点】 弥陀の来迎は、大経第十九願の自力諸善を対象とするのではないか

ア) 鎮西・西山両派では玄義分によりて「発遣来迎」と称する。

イ) しかし、真宗では来迎は方便願を顕すに用いるが故に偏に「発遣招喚」という。

【論点】 発遣の「遣はす」対象はだれか

(課題の在り処)「遣」には、つかはす、おくるの二義があるが、つかはすというか
ぎりは、文言通り、使者が立てられている義となる。「註釈版の解説では、往生人本人と
よめるが、真宗大辞典の義では、使者を遣わして勧告するとして使者が立てられている。
そうすると、遣わす対象は誰かが課題となる。

ア) 釈尊。 釈尊が娑婆世界で説法を通して衆生に極楽へ往けと勧告することをいう。

イ) 往生人本人・・・つかはすと読む限りは、還相回向の大悲伝普化を予定している。

【論点】 二河喩がなぜ、回向発願心釈にあるのか

「回向」といふは、かの国に生じをはりて、還りて大悲を起こして、生死に回入して衆生
を教化するをまた回向と名づく(「回向発願心釈」Ref 七祖註釈版 P470、全 P541)

これは、還相回向そのものである。そうすると、発遣の「遣はす」使者は、往生人本人
であるということとよく対応するがどうであろうか。

- ・ 『散善義』上品上生釈 回向発願心釈の文(Ref 七祖註 P469 -3、全 -P541 5)

ア) 仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、

イ) 弥陀の悲心招喚したまふによって、

ウ) 今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遣ることなく、かの願力の道に乗
じて、捨命以後かの国に生ずることを得。

【論点】 釈迦の発遣は、方便を帯びるか (Ref 真宗大辞典 3 巻 P1801)。

- ・ 発遣の義には方便を帯びると見る説(僧鎔、道隱)

「一心直来」を、釈迦の所説のうち「方便を捨てて他力に帰せよ」の義と捉えることができ、「発
遣」に方便あるがゆえに、弥陀の招喚、これを捨てしむるなりと解することができる。

(考察)方便を誘引調熟(教育的手法)の義に捉えるならば、暫用還廢の意義で含むと解される。

- ・ 発遣の義は方便(要門)に通じないと見る説(深励、石泉)

釈迦は、一の弘願法において、「発遣」と称して、弥陀の弘願へ勧むるとみる。

・ 折衷説(善讓、足利義山)

玄義分及び散善義等に示す「発遣」は、招喚と組合いたるものなるが故に、唯真實教に限る。

『一念多念証文』、『要門・仮門の義』Ref註釈版聖典 P69、全 -P615)。

【結論】方便・仮門は、弘願門への誘引のために設けられたものである。

・おほよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門といふ。これを仮門となづけたり。この要門・仮門といふは、すなはち『無量寿仏觀經』一部に説きたまへる定善・散善これなり。定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいふ。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらへて()、本願一乘円融無碍真實功德大宝海にをしへすすめ入れたまふがゆゑに、よろづの自力の善業をば、方便の門と申すなり。…(中略)…方便()と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり(Ref註釈版聖典 P690)。

「こしらへて」誘引して(Ref註釈版P690脚注)、「一乘」と申すは本願なり(Ref註釈版P690脚注)。

「方便」善巧方便。衆生をさとりに導くために巧みに教化なさる大悲の具現手段をいう(卷末註抄)。

(二)二河譬の意義

・ 『散善義』譬喩(上品上生釈 回向発願心釈)の文(Ref註釈版 P223 ~ 225、七註 P466-8)、全 P539)

・ 『散善義』合喩(上品上生釈 回向発願心釈)の文(Ref註釈版 P225 ~ 227、七註 P468 ~ 470、全 P540))

【論点】二河比の意義(その1) 声が重要

ア) 「玄義分序題門」では「韋提希の請によるがゆゑにすなはち広く浄土の要門を開き」とあるから文言通り要門が開かれている。これは、韋提希に自ら要門に耐えない身と思ひ知らしめ、弘願門の救いの対象にお育て下さる方便(教育的手段)である。

イ) 一方、「散善義 回向発願信釈」は、弘願門のみとみる。

(理由) 「觀經 耆闍会」には、「仏、阿難に告げたまはく、「汝、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」とあるからである。

(理由) 「觀經疏 散善義」の上では、二か所に声を聞くとあるからである。

a) 東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く(比喩)。

b) 「東の岸に人の声の勧め遣はすを聞きて、道を尋ねてただちに西に進む」といふは、すなはち釈迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて尋ねべきに喩ふ、すなはちこれを声のごとしと喩ふるなり(合喩)。

更にその理由

ア) 釈尊の真仮兩門の教えにあつて聞其名号の救いは、弘願門だけだからである。

二河喩の積極的意義

1) 二河喩は、弥陀の本願招喚に組合う釈迦教も又、声であることを示していることが知られる。声がいかに大事であるかを喩で示し合喩で重ねて押えられたものと見ることができる。

- ・ 『浄土文類聚鈔』の文 (Ref 註釈版 P493、全 P452)。

【論点】二河比の意義(その2)

中間の白道は、往生の為には願生心が重要であることを示している。

7) 浄土往生の為には、願生心が重要である。「乃至十念」のサンスクリット原義(citta)に沿う。

1) 願生心と称しても、それが自力になる恐れはない。「貪瞋煩惱のなかによく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。」といふは、本願力廻向の賜物であることを立証しているからである。願生心を与えたまふ主体は阿弥陀如来だからである。「生ぜしめる」とあるからである。「しむ」は、使役と尊敬の両義に亘ると窺われる。

2) 御文は、二種深信の構造(主体を阿弥陀仏と凡夫の双方から構造的に捉える)に習って「十念」にも適用されることを物語る証拠となる御文であると窺われる。

I) (ご法話での適用方法)

a) 如来様が「浄土に生れておいで」と仰せ下さっている(如来が主語)のだから、

b) 「如来様の仰せこそまことと頂戴し、仰せの通りにお浄土に生まれたいと思い取らせて戴きましょう」(往生人が主語)となる。

- ・ 『高僧和讃』善導讃の文 (Ref 註釈版 P590、全 P509)

(69)善導大師証をこひ 定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき 弘願の信心守護せしむ

「十方諸仏に申したまはくこの観経義を造り候に証人になりたまへと祈らせたまひたり(Ref 国宝本ご左訓、新全 P439))。

【論点】「証をこひ」とは、いかなる事態か

「靈験を請求す」(Ref『観経疏』『散善義』後跋、七註 P502、全 P559)

・ 「某、いまこの『観経』の要義を出して、古今を階定(かいじょう)せんと欲す。もし三世の諸仏・釈迦仏・阿弥陀仏等の大悲の願意に称(かな)はば、願はくは夢のうちにいて、上の所願のごとき一切の境界の諸相を見ることを得しめたまへ…(中略)…すなはち当夜において西方の空中に、上のごとき諸相の境界ことごとくみな顕現するを見る」(Ref『散善義』後跋、七註 P502)

「この義証を請ひて定めをはりぬ。一句一字加減すべからず。写さんと欲するものは、もっぱら経法のごとくすべし、知るべし。」(Ref『観経疏』『散善義』後跋、七註 P504)。

(三)発遣・招喚の経意

『大経』出世本懐の文 (Ref 註釈版 P9、全 P5)

「阿難、あきらかに聴け、いまなんぢがために説かん」と。対(こた)へてまうさく、「やや、しかなり。願樂して聞きたてまつらんと欲ふ」と

「聴け」との釈尊の仰せに対して、衆生は、「聞き奉らん」と二種深信の構造で頂戴する。
・聴聞の対象は、釈迦の広讃(第十七願成就文の名号讃嘆)をいう。

『観経』華座観の文(Ref 註 P97～98、全 P54)

「あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。仏、まさになんぢがために苦悩を除く法を分別して解説(げせつ)すべし。なんぢら憶持して、広く大衆のために分別し解説すべし」と。この語を説きたまふとき、無量寿仏、空中に住立したまふ。

「聴け」といい、「苦悩を除く法を解説しよう(=広讃)」との釈尊のお言葉に則して、無量寿仏がお姿(=声になって)を現わされたのである。

釈尊が解説しようとした法こそは、弥陀の本願招喚の勅命であることになる。

これが二尊一致の根拠となる。

『観経疏』『定善義』華座観の文(Ref 七註 P422、全 P514)

「説是語時」より下「不得為此」に至るこのかたは、まさしく娑婆の化主は物のためのゆゑに想を西方に住(とど)めしめ、安樂の慈尊は、情を知るがゆゑにすなはち東域に影臨(ようりん)したまふことを明かす。これすなはち二尊の許応()異なることなし。ただ隱顯()殊(こと)なることあるは、まさしく器朴の類万差なるによりて互ひに郢・匠(えい・しょう)たらしむることを致す。

「東域」とは、娑婆をいう。

隱顯 ここでは一仏が隠れ退き、他仏が現れるという意

【二尊一致の名所旧跡の喩え話】『釈尊の許説と阿弥陀仏の応現』

・郢・匠 『莊子』に出る故事。郢人の左官の鼻端に付いた土を匠石という大工が手斧を振って傷つけることなくこれを落とした話。釈迦・弥陀二尊の意が一致していることを喩えたもの。

『観経疏』『散善義』第五深信の文(Ref 七註 P457、全 P534)、等。

また深信とは、仰ぎ願はくは、一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して依行し、仏の捨てしてたまふをばすなはち捨て、仏の行ぜしめたまふをばすなはち行じ、仏の去らしめたまふ処をばすなはち去る。これに仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づく。これを真の仏弟子と名づく(Ref 七註 P457)。

『観経疏』『得益分』(Ref 七註 P497、全 P556)

「得見仏身及二菩薩」より以下は、まさしく夫人第七観(華座観)の初めにおいて無量寿仏を見たとまつりし時、すなはち無生の益(やく)を得ることを明かす。

「無量寿仏を見たとまつる」とは、招喚の勅命を聞くことをさしている。

『観経』『耆闍会』(Ref 註 P 117、全 P66)

仏、阿難に告げたまはく、「汝、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」と。

『観経疏』「耆闍会 付属釈」(Ref 七註 P 500、全 P558)

「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、遐代に流通せしめたまふことを明かす。上来定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意(こころ)、衆生をして一向にもっぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

「遐代」 はるか後の世。

【論点】 付属釈の御文の意義

「付属釈」は、上来定散両門の益を説くといへども、釈尊の本意は、本願の念佛を称せしむるにあることを示している。

大経第十八願の「乃至十念」を衆生に弥陀仏の名を称せしむると初めて具体的に示された御文である。

(理由) 大経第十八願の乃至十念はサンスクリット語では citta (心念) であって浄土往生の願生心を意味した。それを十声の称名と確定して下さったのは、善導大師、法然聖人であった、これはその証拠の御文の一つである。

五．結び

「散善義」回向発願心釈の二河譬に説かれている発遣と招喚の関係について窺うに、釈尊の「発遣」の意は、定散両門を説くといへども、要門を廃して弘願の法を勧めることであるから、釈迦弥陀二尊一致して、弘願の法を勧められたものであることになる。

以上